囚人の泣く聲か、拷問の叫びか

と見れば監獄署裏の草空地にぶらんこの環のきしるなりけり

七

野邊あるき

氷閉ぢ野菜つめたき冬のみちゆけどもゆけども人に逢はなく

煤烟たなびくもとに葛飾の青菜畑ははるばると見ゆ

八

夜ふけて

ぐろきしにあつかみつぶせばしみじみとから紅のいのち忍ばゆ

時計の針ⅠとⅠとに來るときするどく君をおもひつめにき

九

母の云へらく

どれどれ春の支度にかかりませう紅い椿が咲いたぞなもし

十

あかんぼを黑き猫來て食みしといふ恐ろしき世にわれも飯食む

犬が啼き居り乾草のなかにやはらかく首突き入れて犬が啼き居り

十一

ひもじきかなひもじきかな
わが心はいたしいたしするどにさみし
吾が心よ夕さりくれば蠟燭に火の點くごとしひもじかりけり

白猫

いかにも惱ましい晩だつたと思つた。歩行いてゐるとまるで自分の身體が蒼白いセンジユアルな發光の中にひきつゝまれて匂のふかい麝香猫か何ぞのやうに心までが腐爛してゆくかとさへ思はれた。

霧、霧、濃密な深い麻醉の雰圍氣に新鮮な瓦斯が光り、電燈がぼやけ、アーク燈が濡れた果實のやうに香氣を放ち、葉柳のかげに、舗石に、店々の飾窓に、さまざまの光澤と陰影とが入り亂れて息づかひ深く霧が愈ふりそゝぐ。行きかふ人かげ、馬車や自動車の燈のくるめき、電車の鐸――銀座の二丁目から三丁目にかけて例も見馴れた淺はかな喧騒の市街が今はぼかされ掻き消されて、ただ不可思議な恍惚と濃厚な幻感とが恰度水底のキネオラマのやうに現出する。

その底を私は歩行いてゐた。たとへ無罪になつたにせよ、かりにも人妻と牢獄に墮ちた私、敗德者、――私は深い心に泣き乍ら幻想の燈かげに弱つた身體

を勞つてゆく、潤つた霧がそこにもここにも重い層をなして私の身邊を壓へつける。夏帽子の麥稈、喞へたパイプの火、冷たい目、耳、終ひには背後から肩に手をかけ、咽喉を絞め、剩へ甘いものの腐れた匂さへ病ましい兩の頰つぺたに吹きつける。而も耻と悲哀に彈ぢぎれさうな胸を抑へて、怖々と人目を忍んで歩るいてゆく切りつめた今の自分の心にも何時しか忘れはてた淫蕩な罪の記憶が泣かむばかりに芽ざしてくる淺間しさ。白い霧の中に立つて振り返ると、白い尻尾でも動くやうに足元から怪しげな影が逃げてゆく、向き直つてそつと歩み出すと重い霧の層までが又ふうわりと後から白くからみつく。眞白な獸、私は顫へて自分の身體がさうした陋しい不思議な白い獸に變化してゆくのではないかと思つた。苦しい、苦しい、まるで獸芝居に出てくる白猫の役者のやうに初めは白い毛皮の身のまはりを嘲笑つてゐた人間の浮かれ心までが、遂には

眞實に婬逸な四足獸の惱ましい悲念に歸つてゆくのではないかとさへ思はれる位、霧は怪しくふりそゝいでくる。私は心の心に泣きながら、痛さに腫れた乳の上をしつかと抑へて、折々不氣味な若い白痴の女のやうに自分の背後を振り返つた。そのうちに何時の間にやら重いたどたどしい足どりが泥醉漢めいて來て、時とするとその痛い乳の上から眞白な畜生の手でもふいと飛び出しさうなそんな氣がしてたゞもう恐ろしく、抑へては引つ込ませ、抑へては引つ込ませ、益々深い濃霧の中をあてどもなくまぎれ込んで了ふのであつたが……。

だがもう、時が過ぎた。

夜が更け、空が霽れ、蒼褪めはてた經驗の貴さと冷たい靈性のなやみを染々と身に嗅ぎわけて、哀傷のけものは今深い闇のそこひからびやうびやうと聲を

祕めて鳴き續ける。將に午前二時半、夜明前三時間、拭きすました紫檀の机に鏡を立て、つくづくと險しくなつて了つたわれとわが顏をぢつと凝視めてゐた私は心の底から突きあげてくる悲しさと狂ほしさから、思はず傍にあつたグロキシニアの眞赤な花を抓みつぶした——鏡の中に一層強く光つてゐた罪惡の結晶が血のやうに痙攣んだ五つの指の間から點々と滲み出る。引き裂き、かき捻りながら緊張しきつた心がまた遣瀨もなく啜泣く苦しさ。辛に獸ともならず迷うて迷ひぬいて、やつと夜ふけに靜觀の境地を得た私の靈魂はまた少らずわれと驚かされて、そつとまた鏡の中を透かした。哀れな瞳が狂氣したやうな額の下からぢつと此方を見てゐる。私は悸然として乳の上を抑へた、白い手の芽も飛び出さなかつた、と思ふとぢつと默んだ唇が稍安心と憎惡の薄笑ひを浮べる。

夜が愈更けた。發作の後の悲しみが又犇々と迫る、深い恐怖に顫へながらグ

ロキシニアと冷たい鏡を片よせて、私はまた新らしく顫へ初めた素つ裸の感覺から眼を凝らし、耳を聳て、まるで匍ひつくばつた生蕃の兒のやうに生々と暗い闇の核心を凝視めた。

こほろぎが鳴いてゐる……あれほど執拗く人を苦めた白い濃霧の集團までがもう微の毛ほどの細かい初秋の啜り泣きとなつて消え散つて了ひ、靈岸島の瓦から瓦へ、たゞ幽かに薄明るい露の潤りがチラチラと夜光蟲の漣波の如くに私歇的里の蒼い光をすべらし、取り殘された彼方此方の陰欝な重い土藏の廂合から今はまたセンチメンタルな綠色の星の影さへ一つ二つと燦めき初める、ホフマンスタールの夜の景色、暗碧な空の心——こほろぎまでが恐ろしいお岩稻荷の物かげからまるで小さな硝子玉でも磨り合はせるやうに絶間もなく感覺的な啜り泣きを續ける。

――苦痛と羞辱とに慘たらしく心のデリカシーを傷けられて神經は愈鋭く知覺は彌が上にも冷たくなつてゆく私の現在にもなほ哀しみ極つたかういふ法悦のひと時はある。さり乍ら、緊張し盡した今日此頃の感傷の鋭さは殆どその極度に達してゐる。苦しい、今のやうな切迫つまつた生活があと三日と續いたなら私は狂氣するか、自殺か、それとも疲れはてた肉體自身がそれより以前に脆い破滅を持ち來すか、何れにしても私の生命は長い事はない。目下の錯亂した官能には最早や鱈蟲と蜩と、隣家の自鳴鐘ときりぎりすとの區別さへつかぬほど晝と夜とが顚倒され、色觸の世界にも何時しか夏と冬とが入れ代つて了つてゐる。剩へ日が血のやうに西からのぼり、月が痺れて東へ落ちかゝる怪しい神經病者の幻想さへ時折發作のやうに靈自身を惱やかす。

今もこほろぎが鳴いてゐる。私はぢつと坪庭の闇を透かしながら、そこに如

何なる罪惡が企まれつゝあるか、如何なる草木昆蟲の感覺が又かういふ深夜の心に冷笑し、惑溺し、干渉し、聲もなく戲欷し流涕するかに耳を傾けた。それがよしや暗黑の中に各々幽かに萬物照應の理順を祕してゐるとはいへ、鋭感な今の私には松の葉が如何に光り、槲が如何に戰慄し、雪の下が如何に肺病の蒼白い皮膚を滑らかな苔の上に擦りつけるか瞭然感知し洞察する事が出來る。

沈默が一しきり續いてゆく。

ふと異しい物音がした、キキと何かを引つ搔くやうな、……と思ふとまた性急に、然し怖々と、否寧ろ時折は粗雜に四肢で引つ搔きちらす惡戲な爪の響――それが絶間もなくキキとキキと續いてくる。畜生奴！私はつと立つて電燈をパッとその方へ向けた。薄綠色の生絹の笠を透かして靑く漉されたオスラムの燭光が二階から出窓を斜めに暗い隣の屋根へさつと射す。私はぢつと注意深

くその方へ眼を注いだ。

何といふ悲しい光景であらう、そこには不意の輝きに驚かされた柿の木が眞青に顫へ上つた、と思ふと、濡れた葉とまた眞青な果の簇がキラキラと私の眼を射返した。何たる神祕、落ちついた眞青な輝き……暗い深夜の祕密に密醸された新鮮な酸素の噎びが雨後の點滴と相連れて、冷たい靈性の火花も今眞青に慄き出した。……その下に猫がゐる。白い小さな猫がゐる。青い葉かげを透かして綠青色に燦つき出した新らしいコールタァ塗の屋根の傾斜面からはつと驚いたやうに此方を眺めてゐるではないか。顫へる如に白い華奢な身を竦め、背を聳て、たゞぢつと青い射光の一點を見上げたまゝ、退くにも退かれず、全身の悲哀と恐怖とをたつた二つの金色の瞳に集めて、吸入るやうに前肢をそろへた、あの眼、あの眼、あの切迫詰つた眼の光、……ぢつと凝視めてゐるう

ちに私の瞳は未だ曾て見たことのない皮肉な微笑と燃え上る憎惡と怒とに顫へて來た。

二つの靈がひたと今向ひ會つてゐる。而して各々の急所急所をきゆつと凝視めて、痛ましいほどの凌辱を相互に續ける、その恐怖と憎々しさ、私は電球の尖をキッと差向けたまゝ、まるで青ざめはてた大刀の魚のやうに立竦んだ。

ふと、ある苛酷な夢の記憶が私の胸の底から突き上げる。

それは今朝ほど（もう昨日の事になつたが）の夢に見た、夢とも覺えぬほど的確に而して冷酷な一喜劇である。

夢は幽かな金線の顫へから初まる。たゞ蒼い幻の中の出來事である。冷たい何かの切石の上に、幽かな薄玻璃の鏡の如に坐つて居た私の前に何時からとな

く現れてひたと一列に坐つた八九人の子供がある。うち見るところ七八歳から十五六歳までの頑是ない稚兒の時代から既に物心ついた少年期の成人しきつた顏容の奴まで、それがたつた一人の生長史をまざまざと見せつけられるかと思はれるまで、眼の大きい、額の廣くつて青い、鼻の尖つた、何れも寸分違はぬ、小賢しい面色をしてゐる。而してたゞぢつと私を凝視めてゐる。蒼い光が何處からともなく其奴らの横顏に射しつけると恐怖とも驚異とも、悲しさとも怪しさとも何とも名狀し難い冷たさが犇々と私の身邊に詰め寄せて來た。暫時誰一人口を開くものがない。遠くで幽かにチリツンチリツンと一絃の金線をつまぐる音色がする。

『どうぞその兒を引き取つて下さいませんか。』

私は悸然とした。聲がしたのである。確かに、それが聽き覺えのある聲である。人間の聲とも畜類の呻きとも、又は草木の叫びとも、何ともつかぬ、冷酷な、それでなほ偏に縋り附くやうな、さうかと思ふと又心から人を見くびりせせら笑ひ影の影から操かし瞞らかすやうな、一度聽いたら逃れる事も忘れる事も出來ない、何かの深い執念と怪しい魔力を祕めた聲音である。

『たつた一人で宜しいのです、どうぞ何奴か拾つて下さいませんか。』

聲は何處からともなく追ひ縋るやうに續いた。愈媚びて愈悲しげな哀訴の裏には切つて放した殘忍と詰詐と苦しい蠱惑とがある。私は慄へた。而してたゞぢつと一列の子供達を凝視めた。同じやうな冷たい顏がぢつと同じやうに此方を眺めてほろりぼろりと圓らな大きい眼の底から涙を流してゐる。私の頰にもほろほろ涙が流れてきた。

チリツンチリツン……金の絃をまさぐる音色がする。

その聲は何處からした？　私は其奴らの背後を差覗くやうに幾度か蒼い光の中を透かして見た。猫兒一匹ゐさうにもない。たゞ置いてきぼりにされた幼い靈が泣いてゐるばかり、金の絃の顫音さへはてはやんで了つた。

憐憫と憎惡とが犇々と迫る。私はさうしてゐる内にこの中の一人をどうにでもして引き取らねば濟まないやうな恐ろしいある魔力の壓迫と切實な愛情の罠に引き墮されて了つたやうな氣がする。もう一度怪しい聲がしたらどう爲よう、あれかこれか、眞蒼な私の眼が列の端から端までずつと見渡すと、一緒にその大人た陋しい、眼の大きく額の白い子供の顏がさも恨めしさうにほろほろ泣いてゐる。

私は愈切迫詰つたと思つた――然し聲はそれつきり、いくら待つても待つても誰も何ともいふものがない。次第に恐ろしい沈默と突き放されたやうな寂し

さが切々と私の心を襲うて來た、恐ろしい、どうにかして逃げ出したい――

チリツンチリツンとまた金の絃を弄ぶ響がする。

私ははつとして、電燈の栓をひねつた。と一緒にかさかさと慌てて逃げてゆく物音が、眞闇に搔き消された亞鉛屋根から忍びがへしに飛び下り、忍びがへしから板塀の裏を轉がるやうに辷り落ちるその迅さ、慌たゞしさ……

逃げたな、畜生！　ほつと吐息をついた、私は今、眞闇な向うの路次口に轉がり落ちて逃げゆく猫の滑稽な動作を想像した、而して急に勝ち誇つた感情の弛緩と陋しい皮肉な冷笑とが多少の可笑みをさへ交へて私の心に突き上げてきた。私はまた何となく輕い安堵を覺えた、而して更に注意深く幽かなその夜明前の微光を透かした。

夜は益々更ける。而してこほろぎがまた恐ろしいお岩稲荷のかげから冷たい硝子玉をすり合せて鳴きつのる。

再び電燈をパッと點けた時、私はそこに初めて信實な柿の木の姿を見る事ができた、新らしい悲哀（かなしみ）と驚異（おどろき）、まだ固い眞青な柿の實はキラキラと厚い葉の簇（むらがり）から銀と綠を射返し、あの華奢な白猫のゐたあたりには、たゞ空しいコルータ屋根の斜面だけが今まるで青硝子のやうに上り輝いて、葉末に殘つた露の點滴のみ幽かに光つては消えて落ちた。

こほろぎが鳴く。

私はまた靜かに寂しい闇の核心を凝視（つ）めながら、更に新らしい靈魂の薄明（ツワイライト）を待たねばならぬ。

集のをはりに

數少きわが歌の中より、選びて僅に四百餘種を得たり。わが歌はかの銀笛哀慕調のいにしへより哀傷篇四章の近什にいたるまで、凡ては果敢なき折ふしのありのすさびなれども、今に及びては舊歌なかなかに忘れがたし、たゞ輯めて懐かしく、顧みて哀愁さらに深し。

處々に挿みたる小品六篇のうち、「桐の花とカステラ」「壷の思」の二評論は時折のわが歌に於ける哀れなる心ばえのほどを述べたれども、そのわが今のつきつめたる心には協はず、たゞ詩のみ、餘情のみ、うはかはのたゞひとふれのみ。

わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむとす。わがわかき日も哀樂も遂には皐月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。

わがかなしみを知る人にわれはたゞわが温情のかぎりを投げかけむかな、囚人 Tonka John は既に傷つきたる心の旅びとなり。

この集世に出づる日ありとも何にかせむ。慰めがたき巡禮のそのゆく道のはるけさよ。

この心を誰か悲しく弄ばむやんごともなしやんごともなし

一九一二、初冬

著　者

あとがき

『桐の花』の初版は大正二年一月の二十二日に書肆東雲堂から發行せられた。第二詩集『思ひ出』の上梓から約一年七ヶ月を隔ててゐる。私の處女歌集である。この『桐の花』は『思ひ出』が詩壇に於けると同じ意味――近代的の感覺表現――を以て、當時の歌壇に一の清新體を成したものと見られた。私の詩歌生活に於ける第一期のものの中で私自身にも忘れられない唯一の歌集である。

たゞ當時の私に於ては詩作が主であり、歌作が副であつた。却つて詩（歌謠體以外の）を副とする歌作專心の今日とは覺悟の上にも態度の上にも非常の逕庭がある。で、『桐の花』の歌は『桐の花』としての特殊な主張を通じて、單獨に評價し鑑賞せらるべきものと思はれる。果して此等の作品がその所論を裏づけてゐるか否か、さながらの藝術表現を成し得たか如何といふことである。私はそれさへ認めてもらへば十分であつた。「短歌は一箇の小さい綠の古寶玉である」と私は小論文『桐の花とカステラ』の中に書いた。また一絃琴や古い日本の笛の哀歌にも喩へた。これも現在私の行つてゐることと違ふ。然しながらこの『桐の花』の歌はたしかにこの所念を以て歌はれたものにちがひなかつた。私はこの綠の古寶玉に新樣の佛蘭西象徵派の手觸を加へようとしたのであつた。

時の評家はこれらの歌を難じて所謂人間味や生命の燃燒に乏しいといふことを以てした。然し、本來私の表現しようとしたものはさうしたことの外にあつたのである。それは詩を以て主として、歌に於ては寧

ろ捉へがたき感覺感情の陰影を歌ふにあつた。即ち桐の花いろの「心の紫外線」こそは、私の求むるものであつた。私は私の詩のかげに私の歌を幽かに勞らうとした。私がたまたま歌に還つて來るのはそれゆゑほとんどがかはたれのやゝ永い微光の頃であつた。で無ければ白晝のアーク燈のしめりに通つたものであつた。

で、世の色相の中の、複雜ながらにうす曇つた色合、香ひと香ひとの陰影、聲なき聲、現と幻との境、かうしたもののあはれの果敢なき思慕はまだうらわかい私の常住の夢となり歌となつた。青春の氣品こそはまたあの頃の浪漫的精神の餘韻とも見る人に見てもらへるであらう。この集の中のたゞ二つの小論文の一つとして、私はあの「晝の思」に私の願ふところを記してゐる。たゞ私は感覺のための感覺表現を喜んだのでないことは言へる。「芭蕉の寂びはまだうらわかい私達の落ちつくところではない」とも書いてゐる。「少くとも世を樂しむメエテルリンクの悲愁と神祕な蒼い陰影の靄の中に寂じい心の所在を探す物凄れぬ Sehnsucht の心持、その心を私は慕ふ。」ともいつた。まつたくさうであつたらう。私は明るい光の中にほのかな紫の影をあさり、薄明の時に何かのゑはしい光を尋ねた。あらゆる美しいものの綠、裏箔、汗ばみにじむものの息づかひ、さうしたものの持つ幽趣と微韻とにうちひたる官能的愉樂はあながち末梢神經のそれとも見らるべきでなからう。凡てには感じ易いたましひの啜泣が經らずにはゐないからである。たゞ寂びといふにはみづみづし過ぎる。やはり何といつても二十代の若さが籠つてゐた。

今の私は光をまともに見て影へ通ずる。或は實に觀入つて虛へ放つことも爲よう。然し乍ら、『桐の花』の頃には凡ての定かならぬ影より影を追ふ微光の中の蜘蛛のやうに悲しともない悲しみの中に樂しく翅ば

たゞ私であつた。虚から實相の外輪を傳はうとした。ほのかな藝術的感觸の所緣を辿つてそれからそれへと移つてゆく一種の夢遊病者としてのあの頃の私を省みると、今更に稚くもまたこよない輕薄の中に翔つてゐたものだと恥ぢ入る。然し乍ら、かうした薄明への憧憬といふことも或は近代の人の初めて見る美しいものの一つではないか。兎も角として、私はまた銀色の、何といふ淺はかな衒耀の冠をいたゞいてゐたらう。しかもまだ私は私の純情を、あの山羊の乳の交つた臆病な少年の物恥ぢを、作品や言説に現はれた以上により深くひそめてゐたと思はれる私ではありながら、歌へば少くとも放埒の美の蕩兒であつた。考へると晝も夢見たあの頃の私には現實と夢想との限界が可なりに煙つてもゐた。かういへばうら若い誰しもが一度は通らねばならぬ、また溺れ易く惑はされねばならぬ浪漫的感情に乘つて、うつらうつらと私もあるいて來たのだつた。通つて來たのも今はよかつたとも思つてゐる。初めから淡々とした、或は初老の寂心を做つて蹤いて續く今の若い歌人たちよりも順當でもあり幸福でもあつたとも胸がひらける。

然しまた、何といふ感情の誇張があつたらう。いや、さうした誇張された感情の中に一圖にクラリネットを鳴らした私であつたらう。今思ふと、あの苦しい私の戀愛も、寧ろ我と晝いた戀を戀するところに因したものではないか。罪と責め不淨と厭いた當時にも、愈々となるまでは三年の間といふもの指一つだに觸れはしなかつた。淫蕩の記憶といつたところで、極めてほのかな情痴ではなかつたか。純心でもあり素直でもあつた。信じ過ぎもした。それに較べると、中年期に入つたその後の方がどれだけ現實に於て罪業深くもなかつたか。少くとも『桐の花』の私の稚なさは悲しい微笑の彼方に去つた。

私の歌風は哀傷篇で一變した。しみじみと私は泣いた。私はあまりに世と人とを知らなかつた。自分す

らも。『桐の花』は何といつても空のうしろの薄ら紫である。

私は改めてその編纂當時の記憶を新に現像して見よう。この『桐の花』は難產であつた。その初めこの處女歌集の出版を企圖したのは明治四十四年の秋、『思ひ出』上梓直後、雜誌『朱欒』創刊の直前であつたらしい。それが『朱欒』に毎號廣告されたのみで翌年の夏になつた。それから私の一身上の變動が來た。私は愈々覺悟して一旦の整理を了へた。が、濫浪は私をまた元のまゝに砂上に置いて遠い沖あひに還つた。明治は大正になつた。私はまた『桐の花』の歌の推敲にかゝつた。初校が出てから半歲の後、翌年二月に漸く上梓の運びとなつた。さうして四月末に一家をあげて相州の海を越えて三浦三崎に移つた。そこで『朱欒』を廢刊の止むなきに到つたが、『東京景物詩』の製作も終りをつげた。さうして私の新生がはじまり、改めて『雲母集』の時代が來た。

私の歌作は中學の三年頃から始まつてゐる。四五年の交には雜誌『文庫』へ投じたのが百七首ほどある。明治三十五年十月號から同三十六年六月號に至つてゐる。次で、三十九年から四十年に至る、三回百七十四首の歌が雜誌『明星』へ載せられた。然しこれらは『桐の花』には收錄されなかつた。何故であるか。簡單にいへば『桐の花』の歌風にあまりそぐはなかつたからである。委しくは他の機會に讓るがこの集の跋としては正しいであらう。

明治四十二年の五月に、私は雜誌『スバル』に「もののあはれ」六十三首を寄せた。この集の「銀笛哀慕調の歌が主としてさうである。こゝに於て初めて私の『桐の花』の新體が生れたと云つていい。その後九月に「哀調」四十二首を發表した。これらも同じ章を選んで收めてある。翌四十三年の三月から四十四

年の七月に至る。八回、百九十四首の歌は雑誌『創作』に載り、『スバル』にも一回五十二首を寄せた。『朱欒』はその四十四年の十一月に創刊された。私は殆ど連月歌作した。それで大正二年の一月號までの同誌所載の歌數は二百六十七首になつた。

以上の六百十八首の中から、四百餘首を錄して成つたのが、『桐の花』であつた。

『桐の花』の歌は哀傷篇に入つて趣を變へた。夢見てのみはゐられなくなつたからだ。靈魂試煉の日が來たのだ。ある殘酷にして惡意ある獨斷家は人間の歸趨をこの當時に失つたと私を誣ひたが、それは寧ろ反對であつた。私は却つて眞實に突入したのだ。

それから私は『桐の花』調を破壞した。『雲母集』の粗雜ではあつたが、生氣と健康とが私の上に來た。鮮綠の蘇の葉と銀の光の河豚とが。

あゝ、さうして薄紫の桐の花と乳黃のカステラとが、その時はもう海のうしろの遠い季節の夢となつて了つたのである。

一九三三年、初夏

田園砧村にて

白秋識

復興新版あとがき

歌集『桐の花』は、北原白秋の第一歌集である。初版は大正二年、東雲堂の發行にかゝるもので、三六判の本文は黑と朱の二度刷り、更にまた章の扉々には、一々自筆になる木版の小挿畫が挿入され、何から何まで凡てが瀟洒であり、いかにもこの集の若々しい内容にふさはしいものであつた。裝幀も又、もちろん著者の獨創に成つた。しかし、『桐の花』は、その後版を重ねるに從ひ、漸く印刷その他が粗雜になつてゆき、つゐに憤慨されてゐたものであるが、やがて發行元の東雲堂も潰れて了ひ、暫くは絶版となつてゐた。

大正の末期頃から、著者は再び本集の改訂と補修に專念されて來たのであつたが、畢竟は初版のまゝにといふことで、つひに昭和八年六月に至り、アルスにより全くの初版どほりの翻刻が成り、新しく刊行を見た譯であつた。卽ち前掲の「あとがき」は、その翻刻新版の爲に書かれた卷末記の一部であるが、『桐の花』の重要な文獻の一つであるから、あへてこの版にも再錄した。

つまり、此の復興新版は、今度で三度目の上梓であり、内容はすべて定本たる「翻刻新版」に據つたものである。但し、判をB6判に改め、いさゝか歌の組み方も壓縮した。また裝幀は、新しく恩地孝四郎畫伯を煩はして、特に初版の清新な色を、匂ひを、面影を再現して載いた次第である。

一九四六年、初夏

アルス編輯室にて

中村正爾識

桐の花　定價拾貳圓

昭和廿一年八月五日印刷（復興版）
昭和廿一年八月十日發行

著作者　北原白秋
東京都神田區神保町三ノ一三

發行者　北原鐵雄
會員番號A一〇一〇〇二
東京都下谷區上野山下町二

印刷者　川上貞司
東京都下谷區上野山下町二

印刷所　鐵道弘濟會東京印刷工場
東京都神田區神保町三ノ一三

發行所　株式會社アルス
電話二一七五九段二五七六

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

北原白秋著・最新刊

歌集

白南風

日本の短歌史上に永久に輝く白秋の代表的一大歌集である。此一卷に凝集昇華するもの正しく傳統短歌精神の新しき昂騰開顯であつて、機構の完美、律格の整齊、香韻の渾融、近代新幽玄體を成す珠玉作品。

B6判二八四頁
定價十五圓
（送料二圓）

隨筆集

薄明消息

白秋晩年に書きつづけられた七年間の隨筆即ち身邊消息及び旅行記等の選集。驚嘆すべき詩聖の精神史生活史である。視力の衰へるにつれて心眼愈々明澄に、彼の夥しき詩業の理解鑑賞の鍵は此一卷にある。

B6判二九〇頁
定價十五圓
（送料二圓）

アルス

東京神保町田三

振替東京二四八八八

北原白秋著・近刊

抒情詩集

思ひ出

その印象的な新しい感覺表現は詩壇に於る劃世的驚異として天下の賞讃を博したもの。長篇序文「わが生ひたち」は鮮新典雅な官能描寫に全讀者を魅了した。今日愈々古典的光輝大なる時、翹望の復刻成る。

B6判—三二〇頁
定價十八圓
（送料二圓）

實作指導

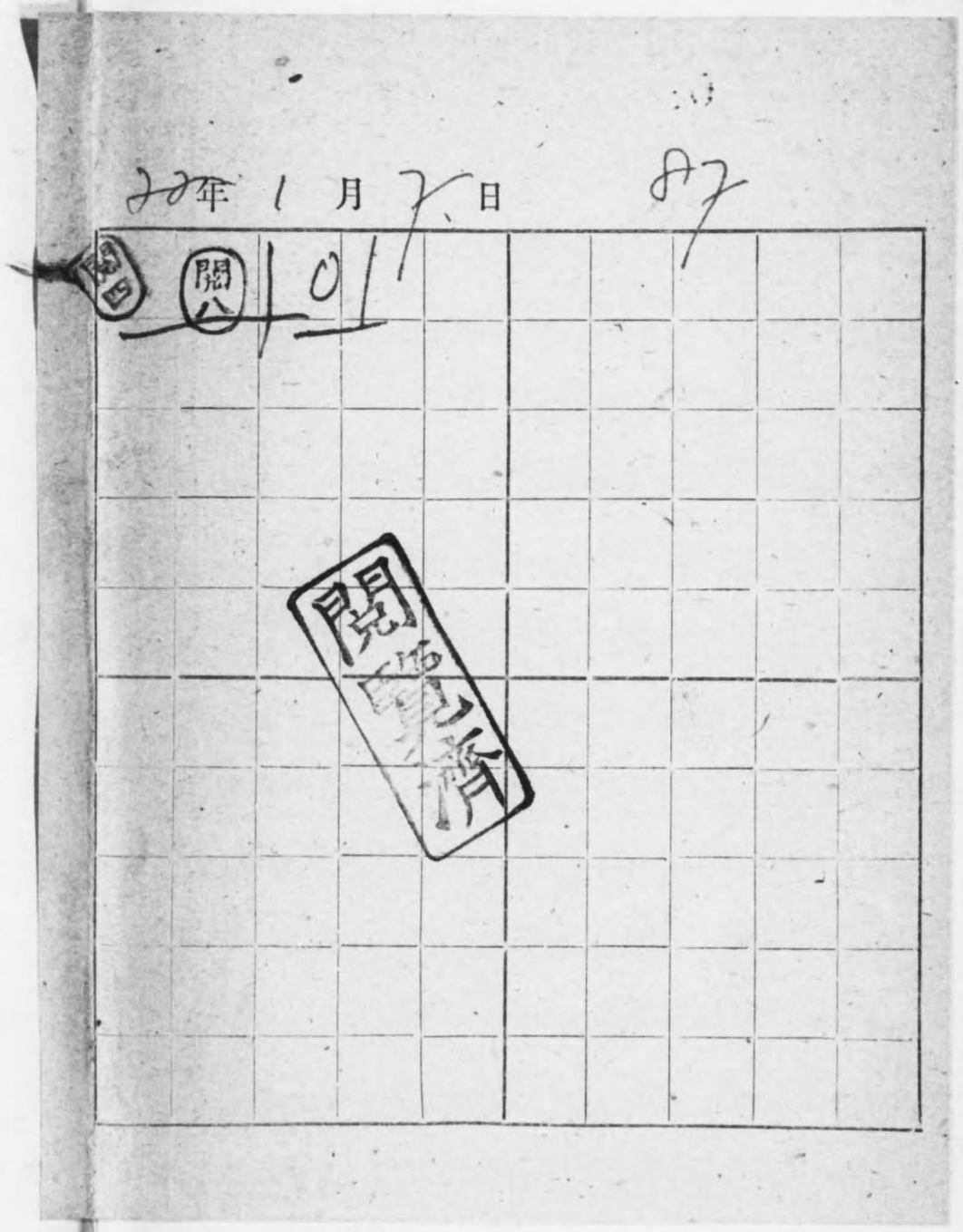
鑛（かなしき）

一代の歌人白秋多年の體驗と不動の精神を傾けて、親しく後進の薫陶指導に當られたる驚嘆すべき記錄集。定型短歌の本流としての語韻、聲調、幽玄、氣魄、丹念に一首一首の微に入り細を穿つ實作の聖典。

B6判—二二〇頁
定價約十二圓
（送料二圓）

東京神田三神町保
アルス
振替東京二四八八八

1008
238
911.168
K164
61



終